校長インタビュー　臨時休業決定後、校長はどう動いたか

臨機応変に対応できて変化を恐れない、しなやかで力強い学校をつくる

分散登校時に生徒が通学に慣れない様子を見て、森田泰司校長は、登校時刻を10分間遅らせることを決断した。時程表の変更やICTの活用促進など、目の前の子どもに必要なことを半歩先の視点で考える学校経営によって、生徒も教員も落ち着いた毎日を送っている。

茨城県　古河（こが）市立総和南中学校　校長　**森田泰司**　もりた・やすし

古河市の公立小・中学校の校長を歴任。古河市教育委員会参事、独立行政法人教員研修センター主任指導主事等を経て、2019年度から現職。

感染リスクを避けるため生活にゆとりを持たせる

３月２日からの臨時休業では、学年ごとに用意した課題を、教員が各家庭を訪れて郵便受けに投函したり、来校した保護者に手渡しをしたりして学びが途切れないようにしていました。そして、生徒のスマートフォン所持率が約96％だったことから、５月３週目からは週２回、オンライン会議ツールによる朝の会を始めました。出席は任意としましたが、学校再開を見据え、規則正しい生活習慣を取り戻すことがねらいでした。生徒が臨時休業中に取り組んだことを発表し合う機会を設けるなど、生徒同士をつなぐ工夫も凝らしました。

通常授業の再開にあたっては、「３密」を防ぐために時程表を見直しました。まず、登校時刻を10分間遅らせました。分散登校時、自転車で通学する新１年生の一部が道に迷っていたからです。交通事故の心配もあるため、登校時に余裕を持てるようにしました。さらに、給食時間は10分間延長し、間隔を空けて配膳できるようにしました。一方で、校内滞在時間を変えないよう、授業時間を５分短縮し、45分授業としました。

時間短縮分の補完手段の１つとして、大型テレビにスライドを映してポイントを押さえた授業にしたり（**写真**）、振り返りなどは家庭で取り組みオンラインで提出させたりと、ICTを活用しています。授業構成を見直すことで、学校で指導すべき内容と家庭で取り組める内容を整理でき、授業の効率化も図れます。ICTの利活用は、９月以降もさらに進める方針です。

各教科でも、３密を防ぎながら学びを深める工夫をしています。理科の実験では、変化を少しでも実感できるようにするため、教員が模範実験を行い、生徒は自席で観察記録する形としました。体育の授業にはヨガを取り入れました。接触や飛沫の感染リスクが少ない上に、心身が整い、健康づくりに役立ちます。

それらはすべて初めての試みで、新しいことには必ず何らかのリスクや不確定要素が存在します。しかし、生徒の学びを保障することを第一に考えて、実施に踏み切ったのです。

写真　2020年度の卒業記念品として寄贈された65型テレビ。後ろの席の生徒にも画面がはっきり見えるため、ICTの活用効果が高まっている。

防災教育などを通して、自分を律する力を育む

学校再開以降、登下校時の事故もなく、生徒は落ち着いて学校生活を送っています。本校はノーチャイム制ですが、生徒はすぐに新しい時程で行動するようになったため、教員が注意するようなこともありません。

本校では、学校教育目標に「心豊かにたくましく、主体的に生き抜くことのできる生徒の育成」を掲げ、日頃から自分で考え、判断する力を育成してきました。例えば、防災教育*では、市のハザードマップを基に自分の災害時避難計画を立てたり、隣接する保育所と合同避難訓練をしたりしています。日頃から自分や他者の身を守る意識を持つことが、コロナ禍においても、自分を律する行動に表れていると感じています。

コロナ禍の収束が見えない中、たとえ中学１年生であっても、自分の命は自分で守れるようにしなければなりません。自分を律する生徒の姿は、その様子を見守る保護者の意識も変えていくでしょう。子どもを起点とした好循環が生まれ、やがて大人になった彼・彼女らが、社会をよりよく変えていく。教育にはそうした力があると信じて、しなやかで力強い学校づくりに努めていきます。

＊ 同校は、文部科学省「学校安全総合支援事業」の拠点校となっている。